

## 1 委員氏名

◎中澤 往訓（朝日小） 小松 優子（広陵中） 窪田 智子（桔梗小）  
白田 岳大（丘中） 大内 順平（広丘小） 佐藤みち子（吉田小）  
湯本 敦（片丘小） 宮澤 史生（山形小） 黒田 敏樹（世話係 朝日小）

## 2 研究主題

「不登校・不適應の児童生徒への校内体制づくりと支援のあり方」

- ① 各校の取り組み・情報交換・検討
- ② 各校の課題
- ③ 各市村での取り組み

## 3 委員会の活動の経過

5月30日(木) 第1回委員会 研究主題および研究内容の検討  
7月1日(月) 第2回委員会 不登校・不適應の児童生徒に関する各校の現状と課題  
8月29日(木) 第3回委員会 〃 各校の課題に対する取り組み  
11月25日(月) 第4回委員会 各校の取り組みの成果、今後の展望(取り組みそうなこと)  
12月20日(金) 第5回委員会 研究のまとめ、今年度の反省、来年度へ向けて

## 4 研究の成果と課題・反省

昨年度は、中学校進学時に入力するエクセルシートの検討を実施し、昨年度深められなかった、各校の不登校・不適應に対する取り組みの共有等の内容を深め、児童生徒や保護者の安心感につながるような活動ができるとよい、という反省の上に立ち、検討を行っていた。

### (1) 成果

- それぞれの学校により事情は違う部分も多いが、各校の実態・課題からスタートし、課題に対する各校の取り組みについて、情報交換ができた。
- 各校で様々な取り組みがなされている中で、成果があがっているものを参考に課題に対する方策を考えた。方策をまとめる時に、どの学校でも実施可能・持続可能な内容を考えることにより、事項に当てはめての活動の工夫を考えることができた。
- 各校の取り組みの共有することはたいへん有意義であり、自校にもどって、新学期や新年度の他校での取り組みを提案したいという委員もいた。

### (2) 課題・反省

- ・情報交換により、たくさんのヒントを得ることができたが、委員会として統一した結論を出すことは難しかった。

- ・不登校・不適應と学力との関連は大きいと委員会の中で話題になった。中間教室、教育支援センター、塾の取り組みなど、徐々に取り組みも始まっているが、今年度は学力に関することを深めることができなかった。

## 5 運営上の課題と来年度への要望

- ・会合は5回おこなった。学校行事等により全員集まらない回もあったが、来年度も4, 5回くらいで活動できればよいのではないか。
- ・来年度は,
  - ・塩尻市が活用しているアプリ「ポーチ」についての研修
  - ・学力保障へのアプローチに焦点を当てる
  - ・近郊の中間教室等のリストづくり
 などを行い、より角度づけた検討を重ねていかれるとよい。

## 6 研究内容

### ○各校の課題を把握する…複雑で多岐に渡る課題

まずは各校の課題を出し合う中で、いずれも複雑で多岐に渡る課題が出された。校種、児童生徒数、職員数といった規模の違い、地域性の違いがありながら、共通する課題が見えてきた。

- ・支援体制づくり…校内の体制、外部機関との連携、市村教育委員会との連携  
情報共有の体制、家庭支援、教職員のゆとり
- ・不登校・不適應を起こしている児童生徒の居場所づくり
  - ・校内中間教室の設置
  - ・慢性的な職員の不足 時間的な制約
  - ・学級担任や養護教諭などへの負担増
  - ・学力向上とのかかわり
  - ・集団や進学に対する不安要素の解消
- ・小中連携…密な連携 進学への不安解消に向けた取り組み

これら課題に対し、各校の取り組みで様々な取り組みが行なわれている。取り組みにより成果が上がっているものもあり、それらを参考にして課題を解決する方策を考えていった。方策をまとめる際に、どの学校でも実施可能・持続可能な内容を考えるようにした。

取り組みとして成果が上がったもの、実施可能・持続可能な内容について、以下の3つの観点でまとめた。

### (1) 未然防止の観点で

#### ① 児童生徒への丁寧な声かけと関係づくり

- ・家庭への連絡…初期対応のルールを学校内で統一しておく。

## ② 校内・学年内での情報共有

- ・欠席・遅刻等の確認を学年全体で把握。
- ・児童生徒の情報を全職員で共通理解をはかる ～A小学校の例～

<毎月1回の児童理解 情報の共有>

9月		10月	
5	1 22		
か整わない。せき、のど痛など。それに伴い、気持ちが落ちてくる。学習の意欲がなかなか出てこないことが多く、家庭学習を怠ることもあった。(学習を理解する力が高い)「学校がいや」「嫌いだ」と考えるようになり、山内Tや担任に話をするようにしては休み時間には行ってもいいと話してある。懇談会でおうちり話をしたいが、おうちの方はどちらかというドライな対応する。		本人は授業中の相談室の利用を望んでいる。保護者懇談会で話題としたが、保護者の方はあまり必要を感じていない。また利用した時にする学校や教室に行かなくなるのを懸念している節もある。その様子も本人が察しており、おうちの方にしっかり話ができない。現在も休み時間には毎日のように相談室を訪れている。おうちの方と再度話すことも必要だと考えるが、訪れる頻度についても相談していく必要がある。	

9/26からほぼ毎日休み時間に相談室を利用。他児がいる時は一緒に遊び、他児がいないときは支援員に思  
もっと見る  
本児にどれだけエネルギーがあるかだが、サポートルームの利用を含み、先延ばしできない状況にあると思います。

毎月1回(月末水曜)に児童理解の情報共有を行っている。学級担任が不登校・不適応や学力不振や問題行動を含む気になる児童に関するその月の様子を書き込み、情報交換を行う。他の教職員はコメント機能を使い、担任以外から見たその児童に関することなどを記入し、多くの職員の手で児童を見ていく体制を作っている。(今年度2学期より)毎月行うことで児童の少しの変化にも気が付き、共有することができている。また主にかかわっている教職員から、このように接してほしい、声をかけてほしいという要望も出てくるため、他の職員もかわり方がわかる。児童の細かい変化がわかるため、未然防止に役立っている。

## ③ 生活アンケートやアプリの活用

- ・生活アンケート、いじめアンケートの実施…児童生徒の実態の把握
- ・塩尻市相談アプリ「ぽーち」の活用

基本的には市職員のみ確認だが、気になる事案の場合は連絡が来る。

## ④ 児童生徒との面談実施

- ・朝の時間や休み時間等を利用して、全児童との面談を実施。面談で聞き取ることで、悩みや相談事も出てくる。

## (2) 安心できる居場所づくりや学力保証

### ① 校内支援体制の強化

- ・学年・学校がチームとなり、複数の目で児童生徒を見ていくこと。
- ・学校での特別委員会(不登校対策検討など)の設立

### ② 校内中間教室の設置と充実

### ③ 学校外機関との連携

- ・市指導主事、高ボッチ教室、医療との連携

### ④ 多様な学びの場

- ・塩尻市教育支援センター(高ボッチ教室)
- ・塾による学習支援プログラム(いずみ塾)…毎週火曜10:00～12:00実施
- ・フリースクール

- ⑤ 様々な登校方法の提示と容認→給食のみ、駐車場でのあいさつ
- ⑥ 家庭との連携（家庭支援も含め）

#### 校内中間教室設置例（B小学校の場合）

○サポートルーム(校内中間教室)の開設・運営(R6 4月から運営)

村の支援員が1名常駐

その他 村教育委員会適応指導支援員が週2回巡回訪問（水、木）

現在、利用児童6名（一部利用を含む）

- ・ 中間教室の運営は適応支援(不登校児への対応)を基本とする。適応支援をしていく中で、対象児童の学習支援については、本人・保護者・担任と相談し必要に応じて行う。
- ・ 中間教室の対象者は、本人と保護者の了解を得た後に校長・教頭の許可を経てから利用を開始する。
- ・ 中間教室の支援担当者は、校長・教頭への報告や保護者や原級担任との連絡を密に取るように心がける。
- ・ 中間教室利用者が行事参加・欠席・原級参加の場合に限り、利用者以外の学習支援もできる範囲で行う。(事前に校長・教頭の承認が必要)。また、その内容や場所については現学級の担任と相談して決める。(学習不振による不登校を未然に防ぐという意味で)
- ・ 利用する児童は一人ひとり利用時間、状況等が違うので、できる範囲で臨機応変に対応していく。



現在はまだ利用児童がそこまで多くないので、きめ細かく対応できている。

中間教室で見通しをもつことで、学校行事への参加ができるようになってきている児童が多い。

今後中間教室を利用する児童が増えてきた時、どう対応していくかが課題となっている。

### (3) 小中連携

#### ① 情報を共有し、丁寧な引き継ぎ・スムーズな移行支援

- ・ 小中職員による合同研修…特性のある児童生徒について
- ・ 小学校での様子を丁寧に伝え、引き継ぐ。
- ・ 年度末に不登校・不適応関係で配慮を要する児童について、引き継ぎ会を設ける。

#### ② 連携体制の構築

- ・ 場合によっては学びの場の見直しも含め、早い段階からの見学・体験等を実施していく。

#### ③ 小学校段階での交流活動

- ・ 進学先が一緒となる他校の6年生との交流

→ A小の総合的な学習の時間の発表をB小児童が見学に行く

# 教育課題検討（塩尻2）委員会 報告書

## 1 委員氏名

世話係 細山 和寿（洗馬小学校長）

○西原 正裕（洗馬小） 奥原 柁彦（塩尻東小） 伊藤 龍生（塩尻西小） 橘 幸恵（宗賀小）  
小野 拓哉（檜川小中） 笹平 さやか（塩尻中） 岡田 祐貴（塩尻西部中）  
元田 武久（両小野中）

## 2 研究主題

「GIGAスクール第2期を見据えたICT端末の活用について」

## 3 活動の経過

5月30日（木） 第1回委員会（塩筑教育会館）

- ・研究主題および研究内容の検討

8月23日（金） 第2回委員会（洗馬小コンピュータ教室）

- ・各校での様子や取り組みについて情報交換を行う。児童・生徒が学習に使っていて効果的に思われるアプリやサイトを紹介してもらい、実際に体験を行った。
- ・各校におけるICT推進に関する悩み・課題等について集約を行った。
- ・塩尻市教育委員会指導主事の島津先生（情報教育担当）にも参加していただき、GIGAスクール構想推進の現状について情報をいただく。

9月17日（火） 第3回委員会（洗馬小コンピュータ教室）

- ・前回に引き続き、各校での様子や取り組みについて情報交換を行う。ロイロノートやeライブラリの活用状況がだいぶ明らかになってきた。また、タブレット端末の持ち帰り、家庭学習への活用に向けても、積極的に進めている事例について情報共有をした。
- ・タブレット端末の持ち帰りについて、どのような学習が適しているか、運用に関わる課題は何か、情報を集めて集約した。
- ・塩尻市教育委員会指導主事の島津先生（情報教育担当）に今回も参加していただき、GIGAスクール構想推進の現状について情報をいただく。

11月15日（金） 第4回委員会（洗馬小コンピュータ教室）

- ・研究まとめ、報告書について（意見交換）
- ・ICT機器更新の方向性、機種選定に対する要望について
- ・次年度への課題、教育課題検討委員会の方向性について（意見交換）

## 4 研究の成果と課題

### (1) 小・中学校、義務教育学校、それぞれの活用状況が明らかになった。

塩尻市では小学校が iPad、中学校が Chromebook を使用しているが、アプリや Web サービスを上手に利用している。ロイロノートや Canva を使った学習活動がずいぶん増えて、児童生徒にとって意欲的に学習に取り組める状況が繰り広げられている。また、教員側も「使いながら慣れていく」「児童生徒と一緒に使って慣れていく」といった流れが広がっている。ICT 機器活用が業務の効率化にもつながるよう、学校での研修や工夫がなされていることもわかった。(一例については、研究内容で後述)

### (2) 持ち帰り学習の取り組み状況が明らかになってきた。

タブレット端末を持ち帰って、家庭学習で活用する例もいくつか出てきた。小学校低学年は家族と一緒に端末を使うとよいこと、小学校高学年や中学校では、児童会、生徒会活動の準備や制作でも活用を進めている例が示された。

### (3) 持ち帰りに対するルールや対応をより明確にする必要性、家庭に向けてタブレット端末を学習で使う意義の啓発

持ち帰りを試行している中で、本来の使い方をせずに遊び道具になってしまっている状況、充電忘れ、学校へ持ってくることを忘れるなど、問題点も見えてきた。保護者にもタブレットの活用方法を理解していただき、家庭での活用を促進するための取り組みが必要となる。具体的な目的や活用方法を共有することで、保護者の理解を深めていきたい。授業参観の際にタブレット端末を活用した授業を見ていただく、家庭へ啓発文を配布するなどの取り組みが大事になると考える。

### (4) タブレット端末の故障・不具合の発生

G I G A スクール構想によって一人一台端末になって4年近くになるが、故障や不具合がだいぶ多くなってきている。キーボードやカメラの故障、動作不良、充電してもすぐバッテリーが減ってしまうことなど、経年劣化がだいぶ進んできている。G I G A スクール構想第二期に向けた端末更新が迫る中、児童・生徒が使う端末にはより高い耐久性が求められる。(提言した端末の仕様等は後述)

### (5) 機器更新に向けての要望

委員の先生方からは以下のような意見が出てきた

- ・今のタブレット端末は、カメラがすぐ壊れてしまった。画質が悪い。カメラの画素数は iPad ほどでなくても、それなりの画素数が欲しい。
- ・耐久性を求めたい。ちょっと落としても壊れないもの。
- ・持ち帰りを想定すると、余計に故障も想定される。故障への対応もしっかりしてほしい。
- ・タッチペンの感度が良いものを。
- ・タッチペン自体も、10000 円以上するものが良い。安いものだと反応しない。
- ・タッチペンで書いたところがずれると困る。
- ・クロムブックがノート代わりになるくらいに。そうすると持ち帰る意味も出てくるかも。
- ・小学校低学年には、とにかく軽さが大事。キーボード分離（デタッチャブル）が実現してほしい。

これらの意見を、塩尻市教育委員会に情報提供をして、県の共同調達に少しでも生かしていただくようお願いをした。

## 5 運営上の課題と来年度への要望

- ・委員会の回数は4回でよかったと思うが、会議の開催間隔が短かったため、十分な検討や実態調査等ができなかった。
- ・他の会と重なってしまったり、校務等で学校を離れられなかったりした先生もいらっしやったので、一堂に会する形にとらわれずに、オンライン会議なども取り入れてもいいのではないかと思った。
- ・メンバー構成は、小学校中学校双方から選ばれていて、小・中双方の実情を知ることができた。学校による方針の違い、取り組みの違いなどが明確になったことで、教育現場における課題がはつきりしてきた。次年度同じ教育課題で委員会を構成するのであれば、小学校と中学校で連携して取り組むためにも、小・中双方から委員を選んでほしい。

## 6 研究内容

### (1) 小・中学校、義務教育学校、それぞれの活用状況について

(活用の一例)

- ・教材のデジタル化：児童用ドリルにQRコードでWeb学習教材を提供。漢字書き順動画、ドリル、テストなど。個別学習に活用可能。
- ・共同編集ツール：無料Webサービス「ふきだしくん」でロイロノートのような機能を利用。保存不可だが、GoogleClassroomと連携可能。
- ・そろばんアプリ：タブレットでそろばん操作を体験できるアプリ。横向き表示対応で、実際のそろばんの動きを再現。
- ・音楽の授業でロイロノートと無料Webアプリ「ソングメーカー」を活用。生徒の成長を見える化する方法を検討中。他校では、Webアプリ「カトカトーン」を使って創作表現の授業を実践している。
- ・ロイロノートで生活記録提出、授業振り返り、クイズ作成。Canvaで生徒会活動の動画作成。長期休みは全員端末を持ち帰り、eライブラリを活用。
- ・Canvaでポスター作成、ロイロノートで共有ノートを活用。長期休みには全員端末を持ち帰り、図工でコマ撮りアプリ「コマコマ」を使用。
- ・グループ活動支援：授業内でのグループ活動促進、多様な意見交流を目的としたWebアプリ「乱数メーカー」を活用。毎時間グループを変えて学習をすすめている。
- ・スプレッドシート活用で業務効率化：学校行事の反省、データ入力にスプレッドシートを活用。プルダウンメニューで入力効率化。

### (2) 持ち帰り学習の取り組み状況が明らかになってきた。

(タブレット端末を持ち帰って、家庭学習で活用する例)

- ① ロイロノートでの課題提出（音読、日記、自主学習、レポートなど）
- ② eライブラリを使用した家庭学習や自主学習
- ③ 児童会、生徒会活動の準備や制作等（ロイロノート、Canvaなど）

(3) 持ち帰りに対するルールや対応をより明確にする必要性

- ・家庭で充電をして学校に持ってくる。(充電不足で授業中に使えない状況にしないために)
- ・目的外の使用はしない。(モラルの育成も家庭と連携して)
- ・故意に破損しないように、取り扱いには十分気をつける。
- ・時間を決めて利用する、長時間の使用は避け、適宜休憩をとって活用する。 など

(4) タブレット端末の故障・不具合の発生

G I G A スクール構想によって一人一台端末になって4年近くになるが、故障や不具合がだいぶ多くなってきている。キーボードやカメラの故障、動作不良、充電してもすぐバッテリーが減ってしまうことなど、経年劣化がだいぶ進んできている。G I G A スクール構想第二期に向けた端末更新が迫る中、児童・生徒が使う端末はより高い耐久性が求められる。

(5) 家庭に向けてタブレット端末を学習で使う意義の啓発

保護者がタブレットの活用方法を理解し、家庭での活用を促進するための取り組みが必要。具体的な目的や活用方法を共有することで、保護者の理解を深めることが求められる。授業参観の際にタブレット端末を活用した授業を見ていただく、家庭への啓発文を通知するなどの取り組みが大事になると考える。

(6) 機器更新に向けての要望

委員の先生方からの意見を参考に、「機種選定に関わるリクエスト」として以下の内容を塩尻市教育委員会に情報提供した。

1. 軽いものを

市から提示されているスペックにもあるように、軽いものを求めたい。特に、小学校低学年は、キーボードを使用する必要性がほとんどない。現行の iPad は、カバー付きでも 1085g ある。ランドセルに入れることを考えると、1.5kg をこえるのは NG と考える。

2. 耐久性

教室内での使用や移動中の取り扱いを考慮すると、「耐衝撃性」「防滴性」が高い方がよい。特に小学生の場合、落下などの事故が発生することも多いため、耐久性は重要な要素。持ち帰りを想定すると、余計に故障も想定される。

3. カメラ性能

中学校で使用している現行のクロムブックは、カメラの画素数が低く、故障も多いと聞いた。iPad 並みとは言わないが、それなりの性能と故障しにくいスペックを求めたい。(カメラが小型化しているので、ちょっとぶつけただけでもピントが合わなくなってしまう。扱いも丁寧にしたくないといけませんが・・・)

4. タッチペンとの相性

中学の先生からのリクエスト。クロムブックがノート代わりになるくらいに使えるとよい。タッチペンで書き込む操作をするときに、感度が良いものを求めたい。タッチした場所からずれてしまうことが、現行のクロムブックにはある。

ちなみに、「USI (Universal Stylus Initiative)」という新しい規格があり、スタイラスペンの新しい入力方式として 2019 年以降、ほぼ Chromebook 専用として採用が進んでいるとのこと。この規格にも合わせられるとよい。



## 5. クラムシェルか、デタッチャブルか、コンバーチブルか

市の方針では、コンバーチブルを推している。参考までに、GIGA スクール構想で使用する端末について、クラムシェル型、デタッチャブル型、コンバーチブル型それぞれの利点と注意点を ChatGPT で分析してみた。

### 【以下 ChatGPT の分析】

GIGA スクール構想において、クラムシェル型、デタッチャブル型、コンバーチブル型の各端末にはそれぞれ特徴があり、それぞれにメリットとデメリットがあります。以下に、各端末タイプについて詳しく説明します。

#### 1. クラムシェル型（ノート PC 型）

##### 【メリット】

堅牢性: クラムシェル型は一体型で、キーボードと画面が一体となっているため、比較的耐久性が高いです。学生が持ち運ぶ際に壊れにくい。

使いやすさ: キーボードと画面が固定されており、安定してタイピングや操作ができ、日常的な PC 作業に適しています。

コストパフォーマンス: 一体型のため、デザインがシンプルで生産コストが抑えられ、比較的低価格で提供されることが多いです。

##### 【デメリット】

画面の可動範囲が限られる: 画面をタッチ操作したり、角度を自由に調整したりすることはできません。

学習環境に合わせた柔軟性の欠如: 手書き入力やタッチ操作を多用する教育アプリに適応するには、限界があります。

#### 2. デタッチャブル型（着脱可能型）

##### 【メリット】

柔軟性: キーボードとタブレット部分が分離できるため、タブレットモードでタッチ操作を重視した授業にも対応可能です。逆に、キーボードを付けて通常のノート PC のように使うこともできます。

軽量: キーボードを外してタブレットとして使うことで、軽量化され、持ち運びやすいです。学生が日常的に使いやすいという利点があります。

タッチ操作: タブレット部分がタッチパネルとして使えるため、手書きやインタラクティブな学習に有効です。

##### 【デメリット】

耐久性: 着脱部分が壊れやすい可能性があり、頻繁に着脱を行うと端末の接続部が損傷することもあります。

コスト: 一体型に比べて複雑なデザインとなるため、価格が高めになることがあります。

#### 3. コンバーチブル型（2-in-1 型）

#### 【メリット】

多様な使用モード：画面を回転させてタブレットとして使用したり、キーボードを反転させてスタンドモードで使うことができます。これにより、学生の学習スタイルに合わせて端末を柔軟に使用できます。

タッチ操作とキーボードの両方を活用：タッチパネルでインタラクティブな操作ができ、同時にキーボードを使ってタイピング作業を行うことができます。教育活動において非常に多機能です。

一体型で持ち運びやすい：デタッチャブル型のように部品が分かれていないので、持ち運びが簡単で一体感があります。

#### 【デメリット】

重さと厚み：クラムシェル型と比べると、機構が複雑で重くなる傾向があります。また、厚みが増すこともあり、持ち運びに不便を感じる場合があります。

耐久性の問題：画面回転機構やヒンジ部分が摩耗しやすい可能性があり、頻繁に使うと故障するリスクが高くなる場合があります。

価格が高い：複雑な機構や多機能を搭載しているため、一般的に価格が高めになります。

#### まとめ

「クラムシェル型」は、安定した作業環境と耐久性を提供し、コストパフォーマンスに優れていますが、柔軟性に欠けます。

「デタッチャブル型」は、タブレットとしての柔軟な使い方ができ、軽量で持ち運びやすいですが、接続部分の耐久性に不安があり、価格も高めです。

「コンバーチブル型」は、多機能で学習環境に応じて使い方が変えられる点が優れていますが、重量があり、故障リスクが高く、価格も高めです。

各端末タイプの選択は、教育活動の内容や予算、耐久性の必要性などを考慮した上で決めることが重要です。

## 教育課題検討（北部）委員会活動報告書

### 1 委員氏名

- ◎ 西沢克弥（麻績小）      清野寛代（生坂小）      塚原まゆみ（筑北小）  
前山夕貴（生坂中）      杉山勝美（聖南中）      倉科高志（筑北中）

### 2 研究主題

「北部の子どもたちの自立に向けての支援のあり方と、教務主任としてのマネジメントのあり方」

### 3 活動の経過

5月30日（木）第1回委員会 会場：教育会館

本年度のテーマについて、年間計画立案、情報交換（テーマの決めだしに関わり自校の課題、教務主任としての課題や悩み等について）

7月24日（水）第2回委員会 会場：麻績小学校

研究テーマへの具体的な取り組みの検討、情報交換

10月11日（金）第3回委員会 会場：麻績小学校

研究テーマへの具体的な取り組みの検討、情報交換

12月17日（火）第4回委員会 会場：麻績小学校

研究のまとめ 本年度の反省、来年度のテーマ検討

### 4 研究の成果と課題・反省

#### (1) 成果

- ・各校での取り組みや悩みなどの情報交換を行うことができ、他校の様子を知ること、悩みを解決するヒントを得たり、工夫している点を知ったりして、各校での日々の教育支援にいかせる話し合いができた。
- ・北部小規模校に共通する子どもたちの実態をベースにテーマを設定したことで、委員が同じ立場で課題検討することができた。
- ・各村とも1村1小学校1中学校ということで、課題検討を通して各地区の小中連携につながる委員会になった。

#### (2) 課題・反省

- ・テーマについては、委員の構成が各校の教務主任ということで、子どもたちへの支援の

あり方と、それに対して教務主任としてどのようにアプローチできるかという二面性のあるテーマを設定した。テーマの方向は良かったと思うが、やや難しい研究になった感がある。もう少し絞られた具体的なテーマの方が研究しやすいか。

### (3) 教育課程検討委員会 来年度のテーマ

- ・北部の各校の実状から浮かび上がる教育課題をテーマにしていく。
- ・北部ならではの（地域性、小規模校故のよさや課題等）のテーマになるとよい。

## 5 運営上の課題と来年度への要望

- ・本委員会は、北部支会教育課題追究委員会と兼ねているという委員会の性質がある。今年度のように、テーマを北部の教育課題について見直しながら研究できるようにしていく方向がよいと思う。
- ・委員会の構成については、来年度のテーマに関係した学校現場職員が委員となることが望ましいが、北部支会との関連上、当面各校の教務主任でよいか。

## 6 研究内容

### (1) 主題（テーマ）設定の理由

「北部の教育課題って何だろう」という問いからスタートした今年度の委員会。各校の教務主任の先生方が顔を合わせ、自校の状況や課題と感じていることを出し合うなかで、職場組織として職員数は少ないが、支援員は意外と多く手厚い指導が可能である。が、一方で、子どもの数は少ないが支援を要する子の割合は少なくはないという現状が浮かび上がった。そして、子ども同士で解決する力が弱い、たくましさに欠ける、中学卒業後、進学先でコミュニケーションがとれずに孤立してしまう子が多い、などという子どもたちの気になる姿に対して、どのような指導支援をしていけばよいのだろうという課題に沿い「北部の子どもたちの自立に向けての支援のあり方と教務主任としてのマネジメントのあり方」をテーマに据えた。

### (2) 各校の実践から

テーマに関わり、①不応等の子どもたちへの支援のあり方②職員間や地域との連携のあり方③小規模校の強みを生かした取り組みや小規模校の課題、という点について、各校の取り組みの実践や、その成果と課題、悩みなど委員会に持ち寄り共有して「教務主任としてどんなマネジメントができるだろうか」意見交換を行った。

#### ①不応等の子どもたちへの支援のあり方

<筑北小>

本校のクラス支援の様子は以下の通り

特支支援員	1名	…	特支中心に（適応指導も兼）
-------	----	---	---------------

支援員	1名	…	1年中心に
非常勤支援員	1名	…	音楽、金管等
算数支援員	1名	…	4～6年へ
ALT	1名	…	各学年の外国後活動または英語＋特支学級等へ
学びの教室	1名		

他にも特支担任が、クラスの授業がない場合に原級の授業支援に入ったり、担任が専科の授業の支援に入ったりしていて、子どもたちが教室や専科の授業で安心して取り組める環境にあるといえる。算数の授業はどの学年も支援が入っており、必要に応じ、支援体制を組み替えてりしている。困り感のある児童に早めに気づけるので、すぐに適切な支援に入れることは本校の強みといえる。

課題としてあげられるのは、支援に伴う共通理解を、担任と支援員、また担任と専科でどう図っていくか。打合せの時間がしっかりとれるといいが、なかなかとれない現状があり、支援の方向性をいかに統一したものにしていけるか今後考えていく必要がある。

常に支援に入ってもらえる環境からか、自分で考える力や、聞きとって理解しようとする力が弱くなっていることが課題。

10月より、支援員（図書館業務を含む）が配置された。保健室登校児童への対応なども含め、支援体制を調整。必要に応じ支援会議を開くなどし、子どものよりよい学びがどうあったらよいかを学校全体で考えた。

11月より、1日2時間（国語、算数）中間教室的な授業と、算数の個別指導などを行ってきた。空き教室の関係で、保健室と少し離れた場所となってしまったが、保健室登校児童や、教室での授業に困難さを抱えている児童が活用している。

1月より、学習に取り組めない児童の居場所作りを検討。学習に対して様々な困難さを抱える児童に対し、適切な居場所がどうあったらよいかを考えていきたい。

<筑北中>

- ・朝の出欠確認 Google フォームでの欠席連絡（全職員が確認できる）  
生徒指導主事、教務主任が始業時間に昇降口で生徒の出欠を確認  
学年職員と情報共有 及び 学校長、教頭と情報共有→必要に応じて学年に指示

- ・継続的した個別の支援会議
- ・保健室来校生徒の対応 職員室に連絡 → 学年で対応

- ・My Study Room の開設  
（スライドで担当職員の配置＋支援員）“かけこみ寺”

学びの場としての一つの選択肢  
自分の居場所→登校出席増



## ②職員間や地域との連携のあり方

<麻績小>

○特別支援学年会をマネジメント

- ・日課（毎週金曜日放課後）に特別支援学年会を位置づける。特別支援学級、通級指導学級担任支援員の9名
- ・全校の配慮を要する児童、気になる児童の様子や、指導の様子、家庭との連携について等情報交換をし、次週の支援の方向、学級担任との連携について確認したり検討したりする。個に応じた担任と支援員の指導体制や役割分担がより明確になるようにした。

○PTA役員と連携し、PTAの活動をマネジメント

- ・行事や学習に、PTAのボランティア活動を（積極的に）取り入れる→CSの運営につなげる。
- ・みどりの日（全校遠足）、マラソン記録会、スキー教室、総合的な学習（ふるさと学習）などへの支援
- ・より多くの人に見守られながら、地域、保護者と関わる機会が増えることを通して、生活や経験、様々な人との関係を広げてくこともねらった。

<生坂小>

- ・個別の支援計画の作成と全職員との共有
- ・支援の必要な児童を中心とした時間割編成→校内支援体制の時間割 毎週配付
- ・支援員が給食の時間、校長室に集まり情報交換（隔週）

↓

昨年度、不登校傾向のAさんや、1学期、教室に入れず、校舎を徘徊していたBさんが、だんだんと教室に入り、授業を受けるようになった。自分の居場所があることにより、表情も明るくなり、挨拶も気持ちよくできるようになった。

- ・生活科や総合的な学習の時間等で、地域講師から生坂村について学ぶ学習を進めたり、校外学習を多く取り入れたりしてきた。

↓

4年生 総合的な学習の時間 「竹の小屋づくり」  
下生坂に茂る竹林を地域の方の協力で、伐採して加工し、小屋を組み立てる学習では、不登傾向の児童や、原級に入れない児童が、意欲的に参加する様子が見られた。



<筑北小>

隔週の水曜日の給食の時間、専科・支援員・特別支援担任などが集まり、児童の情報交換を行うランチタイムミーティングを開いている。他の学校の取り組みを参考に、適切な支援のあり方について考えていく時間を給食時にとることにした。職員会の時間で名前があがらない児童についても情報交換できているが、担任が入っての情報交換の時間をどう確保していくかが、今後の課題である。



### <生坂中>

- ・生徒指導など問題が起きたとき、迅速に情報を整理し、関係職員が集まり、即時対応するのはもちろん、互いにフォローし合えることが本校の強み（迅速なチーム対応）
- ・授業者の立場・生徒の立場に立ち、職員室で自然と話し合いが生まれる雰囲気作り
- ・村教委や役場の担当課と密に連絡を取り合い、困ったときには相相すること。
- ・小中合同職員会（研修会、係会、事例検討など年間5回）の実施



### <筑北中>

- ・小学校との連携を積極的に図る  
交流給食・・・両校の教務主任・栄養士で連携して交流を計画  
小6と中2で交流内容を計画…Google chatの利活用



- 授業参観・・・隙間の時間を利用して、小学校の算数の授業を参観（気軽に、日常的に）  
TT的に授業に入り込む中で  
→児童とつながる 小学校の先生とつながる  
→中1ギャップの解消の一助になるか・・・

### <聖南中>

○総合的な学習の時間における地域との連携を積極的に図り、学びのフィールドを広げる

- ・総合的な学習の時間『あずまやタイム』での活動内容
  - ①善光寺街道：善光寺街道協会会長 麻績メッセ（マルシェ）開催責任者
  - ②太鼓・篠笛：あずまやこだま太鼓指導者
  - ③郷土食：総合マネジメントコンタ
  - ④スペルト小麦：ふたごや農園経営者テレビ松本・松本市民タイムス・信濃毎日新聞・SBCラジオでの広報
- ・地域学習：『きささげ収穫』，『小仁熊トンネル見学』
- ・学年の介護施設への音楽隊訪問



→個が生きる学びの場が広がった



### ③-1 小規模校の強みを生かした取り組み

< 麻績小学校 >

○自己肯定感、有用感を向上させ、キャリア教育につながる活動をマネジメント

- ・保小中の交流活動を連携して企画する。

けやきの日（休み時間、けやき公園での保小交流） 交流給食（小中交流） など

- ・「おみっこ オンステージ」の取り組み

#### 「おみっこ オンステージ」の取り組みについて（お願い）

##### 1 ねらい

学校経営計画「学校運営方針」にある、「学校は自分一人では創り出すことはできない」「学校は学校に集う友だち・教師が学校生活を共にしながら育ち合う場であってほしい」という願いのもと、子どもたちや職員の「〇〇合い」をすすめ、子ども・大人みな楽しく自己表現できる場としたい。

+

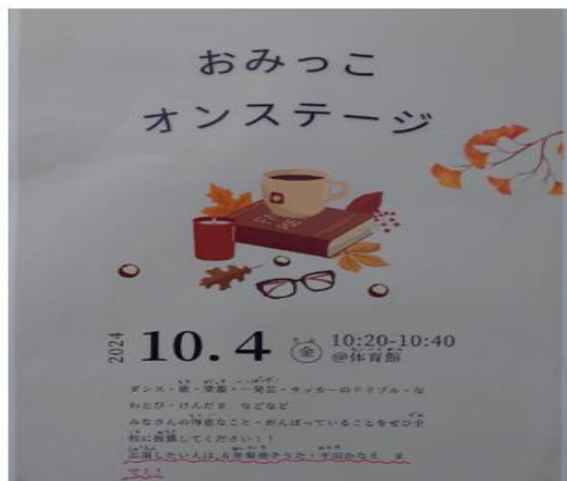
##### 2 方法

・【時間】…月に1度を目安に、2時間目の休み時間(10:25~10:35、10分程度)に、行う。全校放送で「おみっこオンステージ」の開会を呼びかける。

・【会場】…体育館ステージ付近とするが、出演者により、変更も有りうる。

・【出演者】…出演者は、個人、グループ、学級、子ども、大人、学校、地域を問わない。出演者の調整は、教頭、教務、児童会役員(児童会係)が、行う。

・【回数】…毎月1回を目安にする。出演者の希望者数で回数を増やすことも有とする。その場合、体育館の利用学年に配慮する。



10月4日、休み時間に初の試み、「おみっこオンステージ」が開かれました。夏休みにダンスクラブがサマーナイトフェスティバルに参加したように、子どもたちの自己表現の場を何か応援できないか、職員室で話題にしていました。そのことを、ダンスクラブの子どもたちに伝えたところ、子どもたち自ら、児童会とコラボして、ポスターを描き、給食の時間に開催を告知したのです。その告知に応えた第1回目の出演者は、ダンスクラブのメンバーとお手玉名人の四年生、そしてピアノ演奏の六年生でした。司会を務めたのは児童会長。軽快なトークで場をあたためると、出演者は観客と対話しながらそれぞれ披露し、大きな拍手をもらいました。こうして実現した「おみっこオンステージ」。第2回目11月6日、第3回12月19日、第4回1月21日、第5回2月3日を予定しています。地域や保護者の方も参観に来ていただいてOKです。みんなで盛り上げていきましょう。

(麻績村広報より)



不登校傾向であり自・情障学級在籍のK児は、大勢の前で、得意な中国ごまを披露した。また、同じく不登校傾向で学級になじめず保健室登校をしているC児も、好きなダンスをみんなに発表することができた。

→自分を生かせる場、互いの良さを認め合える場が生まれた



### <筑北小>

1～6年で縦割り、ふるさとふれあい講座、児童会企画で全校給食や全校大縄など、人数の多い学校で学年単位でしか行えない活動が、全校で行えることが強みと言える。

また、小学校三校共通としていえるが、北部三校交流で行っているような対面での活動が行えることも強みといえる。

課題としては、互いをよく知るが故に、伝えたいことをはっきり言葉にしなくても通じてしまうこと。困ったことを自分から伝えられなかったり、自分たちで解決していこうとする力が弱かったりということが挙げられる。

本校では、昨年度からつながる時間として、水曜に掃除なしとして生み出した15分間を、交流の時間とした。昨年度は、学年毎、その後連学年、縦割り班と交流する学年を広げていった。今年度は縦割り班を前後期制にし、また班の数も12班にした（班対抗など活動の幅を広げるため）。後期のつながる時間には、それぞれの班だけで活動するのではなく、班をベースとしつつ全校で活動できる方法はないかを、児童や職員になげかけ、アイデアを出してもらい、運営できないかと考えている。

12月は全校つながる時間として、職員が担当し、全校で集まって班対抗リレーやボッチャなどを行った。また、1月の3回は代表委員会で担当し、自分たちで考えた企画を行う予定。本年度は縦割り清掃を年間通して行っているため、活動する時間はだいぶ確保できたように思う。そのため縦割り活動の時間以外にも、学年を超え関わる姿が多くみられるようになった。一方で、高学年がリーダーシップをとっていかれるような活動にしていくことも大事だと思われる。

### <生坂小>

「イクサカラットリuntime」（昨年度より実施）

毎月3回実施 13:25～13:40（15分間）

教師主導で、子どもたちが楽しく遊べる時間を作る。



縦割り班や連学年で活動することを通して、異学年交流が深まっている。



### <聖南中>

あずまやタイム・全校道徳・どっこい清掃等での異学年縦割りグループでの活動

・あずまやタイム

①善光寺街道（18名）②太鼓・篠笛（12名）③郷土食（17名）

④スペルト小麦（18名）年間通して35時間設定（10月ウォークイベント・12月活動報告会）

10月の「あずまやマルシェ」では、別室登校をしているN生が単独でアクセサリーのクラフト店を出店するなど、個が生きる学びの活動につながった。

- ・全校道徳：9班編成を毎月変更し、水曜日1時間目に9つの会場にて授業を実施  
→様々な環境で、多くの子が自分の言葉で語れるよさ
- ・どっこい清掃：26ヶ所の清掃分担を2ヶ月ごと変更→リーダーの育成



<筑北中>

総合的な学習の時間において地域と連携しながらダイナミックに「ふるさと学習」を展開する

- 1 学年 聖山登山、聖高原散策、福祉体験、福祉交流
- 2 学年 シェーンガルテンおみとの連携 <2年生の提案により考案されたメニュー>
- 3 学年 地域活性のための個別のテーマに対して、役場等の  
見学、質問



<生坂中>

Ikusaka 学のスタート

- ・1年生のふるさとのぶどうに関わる活動



<小学生との収穫交流>



<オリジナルラベルで商品へ>



<販売で地域交流（道の駅）>

- ・全校縦割りの講座別の活動



<赤とんぼフェスティバルでの龍翔太鼓演奏>



<地域の「食」>



<生坂「新発見・再発見」>

様々な体験活動、交流活動を通して、児童、生徒たちが地域のよさを知るとともに、更に考えを広げたり世界に目を向けたりできるとよい（様々な価値観、様々な環境への適応）

③-2 小規模校故の課題

- ・教師が手を入れ過ぎてしまい、子どもたちが自ら企画して運営する力が不足している。
- ・教師の支援のあり方。子どもに対して関わる職員の人数が手厚い反面、子どもたちが自分

でなんとかしようとする力の弱さを感じることに。

- ・新しい環境では、なかなか自分の思いを伝えることができない。
- ・子どもたち同士の関わりが強く、縦割りでの活動も比較的多く取れている。どの子もリーダーとしての役割をする場面があるので、1人ひとりにその役割意識をどう持たせていくか。
- ・異学年維持、グループでの活動が多いため、学級単位での活動が少なくなりがちになる。学級意識の向上は課題である。
- ・人間関係が固定され、安定した人間関係の中に置かれていることで、安心の得られる面がある一方で、自分の良さや課題に気づきにくい面もある。
- ・様々な経験を通して、自分を見つめ直したり、考えを広げたり、新たな視点に気づいたりすることにつながる活動を行っていききたい。教科の学習や総合的な学習のさらなる充実。

### (3) 実践から示唆されたこと

- ・「ふるさと学習」（総合的な学習の時間など）が、自分と向き合い、自分と他者を結びつける時間となり、地域や自分の生きる社会を見つめ直すきっかけになるよう、コーディネートしていくことが求められていると感じた。そのために、何を考え、どうアクションを起こし、どんな反応や変化が見られるか、そういったことを北部の先生たちと共有し、語り合うことができると、互いの学校の子どもたちの成長や、教職員のまなびにもつながっていくのではないかと感じた。
- ・各校の実践から、見えてきた一つではあるが、人と人がつながりやすく、そこからダイナミックな活動への発展が期待できる環境が北部小規模校にはあることに改めて気づくことができた。そのよさを生かし、様々な人とつながり様々な人をつなげ、（小規模校にはフットワークよくできるよさがある）子どもたちの自己肯定感、有用感を向上させ、またキャリア教育につながる活動へとマネジメントしていくことが大切ではないかと、北部学校間で考えを共にすることができた。
- ・子どもたち一人ひとりのニーズに寄り添い、理解を示し、支援していくことの大切さを、この1年間を通して痛切に感じた。また、すぐ結果を求めるのではなく、長い目で、子どもたちの将来を見据えて指導に当たる心の余裕を持ちたいと思った。
- ・職員間や地域との連携も、大きな役割を果たしているのので、来年度も力を入れていきたいと思った。
- ・本校でも、クラスの授業に適應できない児童対応を考える場面があり、この会で情報交換した内容が大変参考となった。
- ・縦割り活動では、回数や時間の確保だけではなく、子どもたちの意識向上につながるような支援や指導が必要だということ。それが、自立的活動へと発展していく。

## 科学展委員会活動報告書

### 1 委員氏名

〔世話係〕 米窪 治紀（宗賀小）

〔委員〕 ◎朝日奈佐（塩尻西部中） 上條隆久（桔梗小）

大武宗胤（吉田小） 山岸健司（朝日小）

### 2 研究主題

「科学教育の振興と探究的な児童生徒の育成」

### 3 活動の経過

- 5月30日（木） 研究計画の作成 （第1回科学展委員会）
- 6月11日（火） 郡展の募集要項の検討、県展募集要項の確認 （第2回科学展委員会）
- 6月18日（火） 郡展作品応募通知及び県展作品募集通知を各校にメールにて送付
- 8月 8日（木） 郡展作品目録記入表出品票及び県展出品票を各校にメールにて送付
- 9月 6日（金） 県科学展地方審査 （第3回科学展委員会）
- 9月 9日（月） 県展出品作品応募フォームを県教育委員会へ送信
- 10月11日（金） 郡展賞状の配布（郡校長会にて配布） （第4回科学展委員会）
- 12月13日（金） 郡科学展巡回作品の返却、本年度の反省 （第5回科学展委員会）

### 4 研究の成果と課題・反省

#### (1) 成果

- ・小学校は、例年よりも多い出品数があった。

【出品数】 小学校：170点（R5：151点 R4：159点）

中学校：0点（R5：2点 R4：2点）

- ・粘り強く丁寧に継続してきた研究があり県展に出品することができた。また、巡回展で他校の作品を紹介することで興味関心を高める一助となった。県展は、坂城町立南条小学校を会場に開催された。

#### (2) 課題・反省

- ・小学校では科学に限定しない自由研究なので、質・量ともに十分とはいえないことが課題だと感じる。
- ・小学校低学年では、研究として取り組むのは難しいと思われるが、科学的な要素が含まれていれば生活科などの取り組みも出品可能ということをさらに周知していきたい。
- ・中学校では自由研究を課しておらず科学部頼みの面があり、出品はなかった。研究に取り組むことはどうしても時間的制約があり難しい。しかし、夏休みに自主課題の1つとして取り組めるようにするなどして、出品数増加につなげられるようにしたい。

## 5 運営上の課題と来年度への要望

### (1) 運営上の課題

- ・授業が探究型になってきて、児童生徒が自分で課題を見つけて追究することが当たり前になると思われる。今後、もっと調べたくくなって自由研究が盛んになるのか、それとも授業で探究心を満たされて自由研究が衰退するのかわ、科学展のあり方が変わるかもしれない。
- ・例年、県展地方審査の第3回科学展委員会が、出品者情報の提出期限にぎりぎりとなってしまうている。各校の負担を考えると、9月上旬だが、いつやるべきなのかを今後も検討していきたい。

### (2) 来年度への要望

- ・賞状の印刷枚数を多めにお願いしたが、余り過ぎてしまった。書き損じ等で各校から追加の依頼があることを考えて、多めにお願いしたが予算がもったいない。年度や会長名などをなくしてお願いできれば、余った賞状は次の年に使えてコストダウンができそう。また、賞状印刷する際のひな形があれば、各校で簡単に印刷ができると感じた（手書きで書いてくださる学校もあるかと思いますが、年月日、会長は印刷できるといいと思う）。
- ・今年度は、昨年度から多くの委員が変わったが、前委員長が委員のメンバーであったため、昨年度の様子を確認しながら運営を行うことができた。しかし、筑北方面の委員がいなかったため、作品などの運搬で、委員の先生に苦勞をかけてしまうことがあった。毎年、筑北方面の委員が必要だと感じた。
- ・今年は中学校からの出品がなかったが、今後は出品があったり、小学校の作品でも中学校の学習との関連があったりすると思うので、中学校の先生も委員に残してほしい。

## 6 研究内容

- ・郡巡回展は、小学校3ブロック、中学校1ブロックで行っている。委員がいる学校や近くの学校を最初と最後にするとよい。
- ・郡巡回展の中学校の巡回展は、全ての学校を巡回するような計画でよい。北部と南部の移動の期間は長めにして作品移動に余裕をもたせたい。
- ・郡巡回展小学校作品のブロック分けは、ブロック外の学校の作品を見合えるようにした。
- ・巡回展の作品の大きさを令和元年度に新しくした。来年度も作品の大きさを守っていただけるように引き続きお願いしていく。
- ・巡回作品への評価は、各学校で○をつけていただく方向で来年度も進めていく。巡回作品の評価は、例年通り「○」の数が2～3になるようにする。
- ・各校からの目録の提出は、C4thでデータを送っていただき、運営しやすかった。

## 美術展委員会活動報告書

### 1 委員氏名

◎北村 知香（片丘小） 町田 恵美（洗馬小） 原 由紀子（生坂小）  
 上條 達矢（丘中）  
 世話係 召田 和美（片丘小）

### 2 研究主題

各校の児童生徒の作品研究を通して、児童生徒の表現に対する見方の幅を広げる。  
 巡回展を通して、各校の取り組み、児童生徒の作品のよさを各校に広め、日々の指導に生かせるようにする。

### 3 活動の経過

- 第1回 5月30日（木）各種研究委員会全体会、第1回美術展委員会  
 本年度の事業計画作成 【会場：教育会館】
- 第2回 10月4日（金）第2回美術展委員会  
 県展・今を生きる子どもの絵展打ち合わせ  
 巡回展要項の確認 【会場：片丘小学校】
- 第3回 10月11日（金）第3回美術展委員会  
 長野県児童生徒美術展・今を生きる子どもの絵展  
 地区審査への協力と作品研究会  
 東筑摩塩尻巡回美術展についての説明、資料配布  
 【会場：吉田小学校】
- 第4回 11月15日（金）第4回美術展委員会  
 東筑摩塩尻巡回美術展（郡展）準備  
 児童生徒作品研究会 【会場：教育会館】
- 第5回 1月31日（金）第5回美術展委員会  
 東筑摩塩尻巡回美術展作品返却準備  
 本年度の反省 【会場：片丘小学校】

### 4 活動の成果と反省

#### (1) 成果

- ・巡回美術展は、今年度はすべての小中学校の作品を合わせて、4ブロックに分けて巡回し、地区内の児童・生徒、先生方にそれぞれの作品、題材の良さや面白さを感じていただくとともに、小学校、中学校での学びや9年間での子どもたちの育ちを感じていただくことができた。グループに分かれての鑑賞では、小学校、中学校どちらの作品も見ることができたので、画材についての情報交換やモチーフについての意見交換など作品を通しての小中の交流ができとてもよかった。
- ・児童生徒作品研究会では、塩尻市教育センターの村上啓先生を講師にお招きし、指導していただいた。県展や今を生きる子どもの絵展の入選作品を紹介していただ

き、ICT 機器を活用した新しい表現や描くことにコラージュなどのテクニックを加えて表現の幅を広げたり、画面構成力を高めたりしている例を紹介していただき、描くだけではない表現の方法に気づかせていただいた。

## (2) 課題、反省

- ・巡回展の出品作品は傷んでしまうことがあるので、心配な作品については写真にとって印刷したものを出品してもよいことにしていきたい。また、立体作品についてもそのようにして、見てもらう機会をつくっていきたい。
- ・入選作品など展示されない作品については、多くの人に見てもらえるように C4th での配信を考えていきたい。(県美事務局と連携)

## 5 運営上の課題と来年度への要望

- ・第2回委員会の際、県美事務局の先生に参加していただき、審査手順の説明等地区審査の打ち合わせを行った。(今年度は委員が事務局だったため、派遣申請はなし。)
- ・今年度、巡回美術展準備の日に、県美の大会、関ブロの大会が重なったため、参加できない委員がいた。なるべく、重ならない日程で行っていきたい。
- ・県展、今を生きる子どもの絵展の地区審査の際に、巡回美術展の説明をし、各校に要項と賞状を配布したが、届かなかった学校があったようなので、確実に届くようにしたい。

### <次年度への申し送り事項>

- ・第2回、3回の美術展委員会は、県美の事務局と相談して決めなければならないため、第1回までに連絡をとっておく必要がある。
- ・第2回の委員会において、県美事務局の先生に参加いただき、第3回の地区審査の打ち合わせを行うように計画する。その際、県美事務局の先生方の派遣申請を教育会事務局へも提出する。
- ・巡回美術展の要項を配布する際、各校で受付、回議してもらうよう確認する。
- ・巡回美術展準備として、作品展示用の耳に使う白ボール(60cm×5cm、45cm×5cm)を購入しておく。

## 6 研究内容

○「東筑摩塩尻図工美術作品巡回展」の企画・運営

○「児童生徒図工美術作品研究会」の企画・運営

○長野県美術教育研究会の「長野県児童生徒美術展」、信濃教育会の「今を生きる子どもの絵展」地区審査への協力と作品研究会

※美術展に出品することを想定して制作(指導)にあたる作品の題材は、教科書題材や従来の題材を含め、幅広く取り入れていきたい。

※各校の作品が集まる場での作品研究会は、指導する側の学びの場にもなるので、図工・美術を専門とする先生以外にも参加してもらい、子どもたちに還元してもらえるとありがたい。

## 読書感想文委員会活動報告書

### 1 委員氏名

◎才田理恵（聖南中）          山田雄哉（両小野中）          奈須芳永（宋賀小）  
太田綾子（塩尻西小）          北原綾乃（山形小）

### 2 研究主題

『次の指導に生かす読書感想文の評価』

### 3 活動の経過

5月30日（木）          各種研究委員会 全体会  
7月11日（木）          塩尻西小学校大野校長先生の「読書感想文の評価についての研修」  
係内での分担決め  
9月 6日（金）          集まった感想文を担当ごとに仕分けし読む  
9月19日（木）          支部審査・県審査への作品発送

### 4 研究の成果と課題・反省

#### (1) 成果

- ・応募総数は、小学校九校、中学校三校から84編の応募をいただき、その中から県の審査へと小学校からは編、中学校から編の作品を送ることができた。県審査では、金賞1点、銀賞4点、銅賞9点 計14点の作品が選ばれた。
- ・昨年度の反省を生かし、複数の目で確認を行うことでミスを減らすことができた。
- ・7月に大野校長先生から評価についての研修をおこなっていただいた。それにより、審査の基準を明確にして、県へ送る作品を選ぶことができた。
- ・昨年度に比べ、中学校の応募作品が増えた。

#### (2) 課題・反省

- ・夏休み終了後から支部への提出期間が短く、昨年度に比べて誤字脱字や記載ミス、記入漏れが多かった。（委員の先生方の確実な確認によって、全て審査に送る前に各校に確認し、訂正した。）

#### (3) 教育課程検討委員会 来年度のテーマ

本年度継続予定

### 5 運営上の課題と来年度への要望

- ・委員会の回数においては、丁度良かった。内容においても、特に問題になることはなく会を進めることができた。
- ・予算は、来年度も今年度並みでよいと思われる。



## 6 研究内容

『次の指導に生かす読書感想文の評価』から、そもそも読書感想文は、教育課程に位置付けられているものではない。そこで、全国学力状況調査の意図及び国語科、特に文章読解の授業と関わらせた場合、読書感想文の評価と指導における重要な要素は、次の2点であると考える。

### 1 論理的思考の評価

「感想」（考え）に対して、その根拠となる「叙述」と、その叙述をどう解釈するかという「読み」が明確かつ妥当であることが大切。その「読み」の背景に、自身の体験に基づくものが含まれていると更に良い。

論理的思考に基づいて書かれた感想文

#### 小学6年生 Kさん。(小学校高学年1類金賞受賞)

タイトル「奄美の戦争と未来への大きな約束」～夜光貝のひかり より～

あらすじ→「読んで思ったことが二つあります。一つ目は戦争の悲惨さについてです。大島紬織りが上手な小夜子は、和子にとめられながらも、女子挺身隊として長崎に行き、原爆に合い、死んでしまいました。」（叙述）

「小夜子は、両親を亡くし、唯一の家族の和子を守るために、仕方なく長崎に行ったのだと思います。私は、なぜやりたくもない戦争をして、国に逆らったら罰を受け、国のために命をかけて死ななければいけないのだろうかと思いました。」（叙述からの解釈・読み取り）

「私は、1年生の夏休みに、長崎の原爆資料館に行きました。長崎に暮らしていた子供たちの写真を観て、戦争の恐ろしさを感じました・・・」（体験）

### 2 細分化

・ある大きな感想として叙述やある出来事に着目したとするならば、課題を細分化してその叙述（出来事）に類する他の叙述を探し出したり、叙述と場面の関連性や表現の特徴などに自ずと着目したりする。

細分化され、更に自らの現状を踏まえて感想を書き上げた感想文

#### 中学3年生 Aさん。(中学校3類 銅賞受賞)

タイトル「前へ 未来へ」～「コーヒーが冷めないうちに」より～

「過去に戻れる」という噂を聞きつけ過去に戻ろうと喫茶店を訪れた4人の女性のそれぞれの物語。

**注目した叙述(出来事):「過去に戻れる」**

## Aさんの感想文より

「(過去に戻っても) 現実を変えられないと皆わかっている。それなのに、どうして過去に戻ろうと決めたのか。それが疑問でしかなかった。でも、読み進めていくうちに現実が変わらないからこそ、そうじゃない「何か」を変えるために、彼女たちは過去に戻ったのだと感じた。」

→「私もこの先、もっともっと大きな後悔をする時がくるかもしれない。でも、その時に大事なものは、・・・心ひとつでどんな困難だって乗り越えていける。それをこの本が教えてくれた。受験という大きな壁を前にし、初めて人生の岐路に立たされた中学3年生の今、この本に出会い、それに気づけたことは、きっと、これからの自分の大きな支えになっていく気がする。」

### ①評価について

国語科の授業改善ポイント

- 1 「根拠」とそれについての「読み」の妥当性を検討する授業になっているか。
- 2 プロジェクト学習のような、その文章の本質に迫る問いについて、自己の探求課題について検討していく学習になっているか。

### ②読書感想文コンクールの課題として

- 1 ネットリテラシーと共に盗作や引き写しの指導
- 2 AIを使った文章について

## 会誌会報委員会活動報告書

### 1 委員氏名

◎ 島田 美香（塩尻東小） 村田 綾香（広丘小） 傳田 貴彦（広陵中） 笹川 美佐子（丘中）  
倉科 黎（塩尻中） 岩淵 優太（山形小） 伊藤 未波（麻績小）

### 2 研究主題

教育会会員の教育実践、各校の活動紹介を中心とした親しみやすく読みやすい会誌会報の発行

### 3 活動の経過

回	月 日	会 誌 関 係	会 報 関 係	会 場	開始時刻
取材 ①	5月18日 (土)	塩筑教育会総集会取材 写真・録音・記録 【委員長】	塩筑教育会総集会取材 写真【委員長】	レザンホール	
1	5月30日 (木)	本年度活動概要確認 年間計画 会長・議長に連絡（ <u>6月14日</u> <u>代議員会時に依頼</u> ）	141号 編集 原稿依頼・発送 締め切り <u>6月5日</u> （水） 【委員長、世話係】	教育会館	16:00
2	6月20日 (木)	編集会議	141号 ゲラ刷り校正（初校） 印刷所渡し（6月20日）	教育会館	16:00
	7月1日 (月)ま でに	編集会議 原稿依頼・発送 原稿①【巻頭言・学校紹介・ 講演・一般会員】 締め切り 9月26日（木）	141号 ゲラ刷り校正（二校） 印刷所渡し（7月2日） 142号 編集会議・原稿依頼 締め切り 9月26日（木） ☆141号発行 7月10日（水）	C4thで委員 に送り校正 して島田ま で戻しても らう	
3	10月29日 (火)	会誌原稿受諾状況 原稿①ゲラ刷り校正 口絵グラビア、写真の計画・ 依頼	142号 ゲラ刷り校正（初校）	教育会館	16:00
④	<del>11月21日</del> <del>(木)</del>	原稿①ゲラ刷り校正 原稿②依頼【支会だより・委 員会・同好会】 締め切り12月11日（水）	142号 ゲラ刷り校正（二校） ☆142号 発行12月5日（木）	教育会館	16:00

5	12月12日 —(木)—	再校校正		教育会館	16:00
	1月6日 (月)ま でに	原稿①(二校) 原稿受領・点検・校正 ②ゲラ刷り校正(初校) 印刷所への原稿渡し 3学期活動内容の確認		C4thで委員 に送り校正 して島田ま で戻しても らう	
6	1月17日 (金)	原稿②ゲラ刷り校正(二校) 印刷所への原稿渡し 口絵グラビア、カットの割付		教育会館	16:00
7	2月7日 (金)	(最終) 反省 ☆54号発行2月27日(木)		教育会館	16:00

#### 4 研究の成果と課題・反省

##### (1) 成果

- ・東筑摩塩尻教育会長の校長先生、東筑摩塩尻校長会長の校長先生、各校の代議員の先生を通して依頼を受けた先生方等に寄稿していただき、会報141号、142号を発行することができた。また、会誌54号も発行する予定である。多くの先生方にお忙しい中、実践などを寄稿していただき本当にありがたかった。内容もおひとりおひとりの先生の熱意のある実践であった。これが、多くの先生方に読んでいただけたのなら、成果となっていると思う。
- ・会誌については前年度まで5回の校正をしていたが、印刷所さんと相談の上4回に減らしたが問題はなさそうである。

##### (2) 課題・反省

- ・毎年、会誌については塩筑の全部の学校から、原稿を寄稿していただいている。お忙しいお仕事の中ご苦労いただいている。先生方の負担となっていないか懸念している。
- ・委員会も、内容の考案、原稿依頼、原稿収集、印刷所への依頼、校正、と1年中仕事をしていかなければならない。仕事量の多さが課題である。

##### (3) 教育課程検討委員会 来年度のテーマ

- ・毎年、多くの先生方に寄稿していただいているが、業務の負担軽減などの面から、寄稿していただく学校数を減らすなどを検討してもいいのではないかと思う。また、会報は年2回発行しているが、会誌と会報を同時並行で依頼し、校正を行っていかなくてはならない。代議員の先生方も多くの先生方に依頼しなければならないこと、委員会の作業量が多いことを考えると会報は年1回の発行にすることを検討してもいいのではないかと思う。

## 5 運営上の課題と来年度への要望

- ・委員会は、前年度から2回減らした。委員のみなさんには校正をC4thで依頼するなどして、教育会館に集合することをできるだけ減らした。委員の人数はこの位の人数が適当ではないかと思う。
- ・上にも書いたが、会誌の原稿の依頼数を減らすこと、会報の年1回の発行を検討していきたい。会報についてはデータで配信することも、可能で負担がないのなら検討していきたい。
- ・来年度は、総集会在8月20日に行われるということで、7月に発行する会報に、総集会の特集は載せることができない。内容の見直しが必要となる。
- ・今年度も世話係の校長先生と委員長が同じ学校であったので、相談がしやすく有難かった。
- ・前年度は8名の委員で活動したが今年度は7名で行ってきた。7名で問題はなかった。
- ・昨年度の引継ぎで、会誌と会報を分担して作成を進めていければ良いということだったが、宮本印刷所さんより、一本化して原稿出しを行ってほしいとの依頼があり、分担することはできなかった。今後その方向だと思うので、原稿数を減らすなどの仕事の軽減をしていければと思う。

## 6 研究内容

### (一) 「塩筑教育会報」の発行

- ・141号 特集(7月) 会員発表  
「子どもが描きたいと思うとき」美術展委員会 北村知香先生(片丘小)  
講演会会員感想(塩尻西小、筑北小、塩尻中)本年度の教育会事業計画 等
- ・142号(12月) 特集「我が校のチャレンジ」(洗馬小、麻績小)
- ・コラム「今さら聞けない学級経営」塩筑の先生方からアンケートをとりまとめた。

### (二) 「会誌」塩筑教育 第54号の発行

- ・グラビア「塩筑っ子」では、塩尻・中央・北部支会の各校が順次掲載されるよう学校紹介を計画。本年度は、生坂小・塩尻西部中を紹介した。
- ・講演会記録「塩筑教育会の『これまで』を見つめ『これから』を想う」… 青柳直良先生
- ・会員からの寄稿文掲載(全ての学校から 教育実践、エッセイ、小作品誌上展)
- ・研究委員会の活動、研究会の歩み、地区教職員会だより、自主研修・県外視察者一覧、役員・各種研究委員会名簿、教育会だより
- ・会誌会報発行へのご協力ご支援、誠にありがとうございました。

## 情報ネット委員会活動報告書

### 1 委員氏名

世話係 赤羽 利樹（生坂小）

◎ 鈴木 百合恵（広丘小） 森村 忍（檜川小中） 竹内 良康（筑北小）

### 2 研究主題

教育会ホームページを用いて、教育会の活動を広く紹介する。

### 3 活動の経過

5月30日（木）第1回委員会 全体会 本年度の活動計画の検討

6月25日（火）第2回委員会 HPの作成講習会 仕事の分担

11月1日（金）第3回委員会 HPの作成状況確認 活動の反省

### 4 研究の成果と課題・反省

#### (1) 成果

・教育会の年間活動予定をもとに、ホームページに記載したい内容を決め、C4th を使って委員の先生方に原稿を依頼した。早めに依頼をすることで、写真と文章を掲載することができ、活動内容について分かりやすく伝えることができた。

・今年は、資料室委員会と合同で委員会を開催した。資料室の様子も、ホームページで紹介することができた。

#### (2) 課題・反省

・原稿や写真の依頼については、各委員長の先生方に負担がかからないような方法を検討していきたい。

・委員がアップした記事について、チェックすることを徹底するようにしたい。

### 5 運営上の課題と来年度への要望

・委員会の性質上、メールのやりとりで活動を進められる。会の開催回数が少なくても、それぞれで活動を進められるよう、係内で仕事を分かりやすく分担する。

・ホームページ掲載用の写真と文章の依頼を、なるべく早めに行う。

・資料室を紹介したり活用を促したりするためにも、今年のように、資料室委員会と情報ネット委員会は合同で開催してもよいのではないか。